


博士論文審査および最終試験の結果

審査委員（主査） 早津恵美子 

本論文は、現代日本語の始動を表す複合動詞「しはじめる」「しだす」「しかける」について、それぞれの意味、相互の意味の異同、さらには、テキスト内での機能をめぐって考察した研究である。これらの複合動詞は、アスペク的な性質のものとしてとらえて「局面動詞」ともよばれるもので、その意味的な性質についてはこれまでもさまざまな観点から研究がなされてきているが、いまだ明らかになっていない点も少なくない。本論文はこれまでの研究に学びながらも、多数の用例を丁寧に分析・検討することによって新たな知見を多くみいだしている。また、これまでの局面動詞研究では、一文内での分析が主で、テキスト内での機能についてはあまり考察されてこなかったのだが、本論文はそこに意欲的にとりくんで一定の成果をあげ得ている点で十分評価でき、また、今後の研究の発展も大いに期待できる好論文である。

本論文は大きく2部にわかれ、第1部では、「局面」「局面動詞」の一般的な性質が述べられたあと、個々の局面動詞の意味が順に検討され、第2部では、始動を表す局面動詞のテキスト内での機能が、主として「しはじめる」を中心に述べられている。

第1部のうち、第1章の「局面」「局面動詞」についての所論はやや明晰さに欠ける嫌いがあるが、第2章から第4章において「しはじめる」「しだす」「しかける」のそれぞれについて述べられている内容には興味深い指摘が多い。そういった興味深い見解を導いたのは、前項動詞のアスペク的な性質による種類の違いを考慮に入れたこと（動作動詞・変化動詞・状態動詞）、個々の局面動詞の文中でのふるまいを綿密に観察しようとしたこと（副詞との共起関係、肯定・否定の表現、主体の単複）、スル形・シテイル形の違いを部分的にはあるが捉え得たこと、また、それぞれの後項動詞が独立の動詞として使われるときの意味特徴を考察しようとしたこと、といった多面的なとりくみの成果だと思われる。そして、そうして得られた知見は、「しはじめる」「しだす」「しかける」の意味特徴を明瞭にし、さらには、「しはじめる」と「しだす」の相違、「しはじめる」と「しかける」の相違を、先行研究以上に明らかにできたことに大きく役立ったと思われる。三者相互の異同についての総合的な考察がほしかったところだがそれは今後期待すべきことだろう。

第2部は、局面動詞のテキスト内での機能の解明に取り組んだものである。「しはじめる」が、テキストの流れのなかで、ある出来事の開始時間を特定しその時以降その動作が継続することを示すことによって、時間的に隣接するもう一つの出来事との密接な関わりをも示す機能があることを、適切な例文とともに具体的に示している。今後、「しだす」「しかける」についてもテキスト内での機能が明らかにされていけばこの観点はより興味深いものになり、アスペクト研究への貢献も大きなものとなろう。この論文はそれへの小さいが着実な足がかりを築いたものとして評価しうる。

本論文は、以上述べたように、始動を表す局面動詞についての優れた研究と認められるものではあるが、批判すべき点、あるいは今後の改善がまたれる点がないわけではない。審査委員の間からは次のような点があげられた。

- (1)先にも述べたように、本論文がとりあげている問題についてはこれまでも種々の研究がある。それらの成果との違いや本論文のオリジナリティーが必ずしもわかりやすく述べられているとはいえない。本研究で明らかにしえた重要な点も多いのだから、それをより明確に主張すべきではなかったか。また、本研究にとって重要な術語について先行研究でどのように議論されてきたかについても整理・説明が必要だったのではないか。
- (2)ロシア、アメリカなどにおけるテンス・アスペクトに関する理論的研究に学ぼうとする姿勢はみられるのだが、やや弱いという印象は免れない。もう少し深く理解することができていたら、本研究が理論的にもよりしっかりしたものになっただろう。
- (3)個々の用例について綿密に検討しようとする姿勢はよいのだが、それに意を用いすぎたあまりか、記述が個別的にすぎて一般化への指向に欠けているように思われたり、何箇所かの説明の間に重複がみられたりする点があり、惜しまれる。また、思弁的とも思われる説明がところどころにみられるが、言語学の論文としては、(広い意味での)言語形式に関心をもった論述、フォーマライゼーション、より実証的な裏付けなどを目指すべきではなかったか。
- (4)多くの用例をもとに分析しようとした努力は評価されるが、用例の収集方法や用例数に問題がなくはない。電子化資料を使って用例数を増やしたり、日本語母話者への直接的な調査(インフォーマント法)をとり入れて分析の参考にしたりという方法もあったはずで、そういったことによって、より確実な結論に導いたのではないか。
- (5)扱っている問題の性質からしてなかなか容易ではないかもしれないが、表や図などを使って、それぞれの局面動詞の特徴——相互の共通点・相違点など——をわかりやすく示すことはできなかったか。
- (6)第1部と第2部を分けてしまうのではなく、第2部で検討されている、テキスト内の機能についての分析結果を、第1部での各局面動詞の記述に有機的に関連づけて盛り込むことはできないか、そうすることによって各局面動詞についての記述がより豊かなものになるのではないか。

このように問題点は少なくないが、口述審査において、本人がこれらの不十分さをきちんと理解しており今後改善すべく努力していくつもりであることが確かめられ、その力も十分に備えていると思われた。この研究をもとにさらに大きな成果が期待されるものである。

以上、本論文の優れた点、批判すべき点、口述審査における応答内容などを総合的に勘案した結果、審査委員全員一致で、本論文が博士(学術)を授与するに相応しい水準に達していると判定した。